

青少年ふくしま

福島県青少年育成県民会議

第55号

平成29年7月25日

皆様には、福島県青少年育成県民会議の事業に対しまして、日頃より、温かい御支援や御協力をいただきまして、心より感謝申し上げます。

当県民会議は、各市町村民会議、関係機関・団体、企業、NPOの皆様との緊密な連携のもとに、未来を担う子どもたちが安全・安心に、そして、健やかに成長していける地域づくりを推進してまいります。皆様の御理解、御支援をお願いいたします。

平成29年度福島県青少年育成県民会議について

福島県青少年育成県民会議は、戦後の青少年非行の第2のピークといわれた昭和41年10月の結成以来、多くの皆様に支えられ、昨年度は結成50周年の節目を迎えることができました。

今年度の県民会議の組織、重点推進事項、事業概要は以下のとおりです。

《組織》

- ◆ 役員 ・会長：内堀雅雄福島県知事 ・副会長：2名
 - ・理事：11名（鈴木登三雄常勤理事は福島県青少年会館館長と兼務）
 - ・監事：2名
- ◆ 議員 ・関係行政機関、学識経験者、青少年育成団体、青少年団体、報道機関（今年度は134の個人・団体）

《重点推進事項》

- 1 「大人が変われば、子どもも変わる県民運動」の推進
- 2 「地域の子どもは、地域で見守り育てる運動」の推進
- 3 青少年関係機関・団体との連携の強化
- 4 青少年を取り巻く有害環境対策の推進
- 5 困難を有する子ども・若者への支援

《事業の概要》

- 1 ふくしま青少年育成セミナー～大人が変わるためのセミナー～
- 2 「家庭の日」作品コンクール
- 3 福島県青少年育成県民会議会長表彰
- 4 第39回少年の主張福島県大会
- 5 第40回福島県青少年健全育成推進大会
- 6 「大人への応援講座」の開設支援
- 7 「福島県青少年総合相談センター」の運営
- 8 関係機関との連携の強化と広報活動の推進



平成28年度「家庭の日」
1・2年生絵画部門最優秀賞
「ぼくのたいせつなかぞく」
須賀川市立稲田小学校
岩井 智也さん

【連絡・お問い合わせ先】

住所 〒960-8153 福島市黒岩字田部屋53-5（福島県青少年会館内）
TEL 024-546-0002 FAX 024-546-8311
mail f-youth@io.ocn.ne.jp
HPアドレス <http://www.fukushima-youth.com/>



常勤理事からのメッセージ 今、「小さき者たちへ」

福島県青少年育成県民会議 常勤理事 鈴木 登三雄

ちょっと月日を遡ることになるが、昨年9月、内閣府の主催行事に参加するため、札幌市を訪れた。前日夜に当地に赴き、翌日の行事が終われば直ちに帰路につくような強行日程であったが、久方ぶりの札幌である。どうしても目にしておきたいものがあった。

それは、大通公園にある有島武郎文学碑である。文学碑は宿所と行事会場を結ぶ路程からやや離れるものの、歩いても行けそうな距離にあることは確認していた。そこで、同行者とは別に早めに朝食をすませ、朝の通勤者と交差しながら大通を西へ西へと進むと、楡の木立に包まれるように佇むその文学碑を見つけることができた。

文学碑には、有島の小説「小さき者へ」の巻末の次の一節が、武者小路実篤の書によって刻まれていた。

『小さき者よ。不幸なそして同時に幸福なお前たちの父と母との祝福を胸にしめて人の世の旅に登れ。前途は遠い。そして暗い。しかしおそれてはならぬ。おそれない者の前に道は開ける。行け。勇んで。小さき者よ。』

「小さき者へ」は、有島自身をモデルとして、幼くして母を亡くした子ども達への父の思いを綴った作品である。特に、巻末のこの一節は、父から子どもらへの、深い情愛に満ちた、切ないまでの励ましのメッセージとなっている。

私がこの作品に初めて出会ったのは高校生の頃で、その時の感想は、有島特有の内省的な暗さが印象に残る程度だったと思う。その後、年月を経て自分も親となり、改めて何かの折にこの作品に再び触れた際、親となってこそ分かる子への思いと子育てをめぐる機微や葛藤を、この作品から強く感じたことを覚えている。

そして、さらに歳を重ね、青少年育成を組織名に掲げる団体に属し、広く子ども・若者の育成支援に携わるようになった今、思ったことは、もし有島に倣い、今の子ども・若者に向けメッセージを発するとしたらどのようなものになるのだろうか、ということである。

今、社会生活を営む上での困難を有する子ども・若者の問題が深刻化している。当県民会議が運営している「福島県青少年総合相談センター」には、不登校やニート・ひきこもりなどに関する相談が数多く寄せられており、それら相談件数は年々明らかな増加傾向を辿っている。

こうした今において、子ども・若者に対してどのようなメッセージを発することができるのか、あるいは発するべきなのか。少なくとも、その答えを探るための模索を各家庭の問題として押し込めてはならないものと考えます。

ちなみに、福島県青少年総合相談センターでは、最近、案内チラシとポスターをリメイクしたが、そこで使用しているキャッチコピーは変えずに同じものとしている。それは、『ひとりで悩んでいませんか?』というメッセージである。



子どもの社会参画の支援

5月22日（月）今年度の県民会議総会が終了した後、青少年会館大研修室で、NPO法人「寺子屋方丈舎」（会津若松市）の江川和弥理事長様から「子どもの社会参画の支援」と題して御講演をいただきました。以下は、その概要です。



1 「子ども中心」の教育への転換

- ① 子どもには自ら学ぶ力があり、自己決定力がない未熟な存在ではない。
- ② 子どもにとってどこで学ぶかではなく、何を学ぶかが大事である。
- ③ 子ども主体の学びが、相互の信頼を深める。
- ④ 子どもたちの意欲的な学びをつくり出す場が「子ども食堂」である。子ども食堂は誰もが調理し参加し、つくることを通じて互いに交流し支え合う。（自律）

2 子どもの社会参画とは

- ① 不安であることは悪いことではなく、誰もが不安であり、誰もが孤独である。
- ② 誰もが「同じ」である必要はない。誰もが違っていい。違うから話し合いが生まれる。
- ③ どのように生きるのか、どのように人とつながるのか。たくさんの人とつながった方が目的が実現しやすく、課題を解決しやすい。
- ④ 仕事を任せられると責任感が芽生え、それが、子どもたちの驚異的な成長を促す。自分で決めることが人を成長させる。
- ⑤ 単なる「お手伝い」ではないボランティアクラブ活動等、個人の限界を突破する「体験」を提供することで、人と人がつながる価値が出てくる。
最後に、ヤン・カールンの著書『真実の瞬間』から、その一部をご紹介します。

人は誰もが必要とされているということを知り、感じなければならない。人はだれも一人の人間として扱われたいと望んでいる。責任を負う自由を与えれば、人は内に秘めている能力を発揮する。情報をもたない者は責任を負うことができない。情報を与えられれば責任を負わざるを得ない。

（以上）

◇◇◇ ひとりで悩まずに「青少年総合相談センター」に！！◇◇◇

当県民会議では、福島県からの委託により、福島県青少年会館（福島市）内に「福島県青少年総合相談センター」を開設。併設の「福島県ひきこもり支援センター」との一体的な運営により、様々な悩みの相談に応じています。ひとりで悩んでいる青少年、お子さんが心配な御家族の方、お気軽に相談員にご相談ください。また、毎月第3土曜日には、子ども・若者の発達に関する「専門相談」も開設しています。

面接による相談は、事前の予約が必要です。まずは「相談専用ダイヤル」にお電話ください。秘密は厳守いたします。相談は無料です。

- | | |
|-------|--|
| ○内 容 | 青少年本人、保護者や家族からの電話、面接(予約)、メールによる相談 |
| ○開設場所 | 福島県青少年会館1階（福島市黒岩字田部屋53-1） |
| ○相談時間 | 火曜から土曜の9:30～17:30（日曜、月曜、祝日、年末年始を除く） |
| ○連絡先等 | 相談専用ダイヤル 024-546-0006（電話・FAX）
メールアドレス soudan-fukushima@gaea.ocn.ne.jp |

思春期の子どもと向き合うために

6月24日（土）、福島県青少年会館において「第1回ふくしま青少年育成セミナー～大人が変わるためのセミナー～」を開催いたしました。講師の桜の聖母短期大学学長 西内みなみ先生より、「思春期の子どもと向き合うために」と題して御講演をいただきました。以下、その概要を御紹介いたします。

- 思春期は大人の入り口である。
- ひきこもりのきっかけは思春期で、他者から見られる自分を意識する時期だからである。
- 昆虫は「さなぎ」という過程を経て成虫になるが、その中はドロドロに溶けて「命の再構築」ともいべきダイナミックな変化が起きている。しかし外見からその変化はみてとれない。だからといって、つついたり、殻を破ったりしたら大変なことになる。
- 思春期の子どもは学校のこと、親のこと、自分の将来のことを考えて、揺らいている。それこそ「さなぎ」のようなドロドロの状態である。親は「つつく」のではなく、「見てまっている」ことが思春期の子どもにとって大切なことである。
- 大人にとって「困った子ども」でも、実は本人が一番困っている。自分をコントロールできないのがこの時期の特徴である。非社会的問題行動、ひきこもり、家庭内暴力等がみられる。環境設定が大事であり、予防教育も大切になってくる。
- 幼少期からの子育ての結果がでるのは、思春期である。親にとっては「勝負の思春期」であるが「親との絆がいかんできてきたか」が問われる。「おむつを替えたことがない」親を子どもはどう思うだろうか。



- 「子どもたちが性行為を体験するのは、中3の卒業の春休み、高1の夏休みがピークである」というデータがある。「性」は、身体の変化や性行為のことを意味するのではなく、命を大切にすることであり、生きていくことそのものである。そこをよく理解させるよう大人は努めなければならない。そのためにも「自分を大切にしてくれる親がいる」と子どもが実感していることが、性行為を安易に容認する意識や軽はずみな性行為に歯止めをかけることができる。

(以上)

◇◇◇ P T A や育成会の勉強会・講演会に「講師」を派遣 ◇◇◇

当県民会議では、「親子のコミュニケーションづくり」「地域における子育て」「現代の子ども姿」「ボランティアが地域を変える」「食育と子どもの成長」「メディアとの付き合い方」など、青少年健全育成や地域づくりに関するテーマでお話しいただける36名の講師人を登録しております。

県内の青少年育成団体、P T A、公民館、企業等が開催される「勉強会」や「講演会」に、テーマにそった講師を派遣します。講演時間は1時間程度で、主催者の御負担は、講師謝金（一律9,300円）と旅費（講師自宅から会場までの往復分）となります。

詳しくは、県民会議のホームページ（「大人への応援講座」部分）をご覧ください。